



中村俊定文庫  
文庫 18  
54  
4



了鹿集

崑山集卷言

五

馬麻集卷之五

崑山集各部之門



日本古事記の國書常紀の年月  
日本神代卷の年月も  
唐土も山川五祀等と祭と  
とあり外夷とてその神と  
まゝにさるるまればなり凡そ建  
此より鬼神のるるをいふ  
しるるをいふなり

十月廿十と云ふはのちの  
あり神書より呂波四十七字  
とあり拾遺愚草に伊波  
此等ありありと云ふ事  
伊呂波四十七字と云ふ事

月一然らばはの終らむも  
せすなるくし三三より別  
此事たすて或は十の末は百  
千方るとはけりもあらずを  
そはの終とせんりやむ

十月におもひまがこれの山神  
一句のふ十月は神の心をも  
よかりぬは是の山神をり  
也といふ事歎他十月おは是の  
山神を人るまことといふやう  
いとゆふ

おま母も年ころはけいりは  
城軍よそははかんとも  
佐おまといひひてさうん  
け試をいはらばはとあつて  
いふやう歎

山ま母もあまはらぬおま  
穀のりふ  
風のよやままはらぬおま  
といふまはら

おれていふ山より出るお時  
又か一おのていふといふ定家  
といふ諷のさうはふおま  
ふおまこれといふおま  
めていふといふおの神といふ  
お待ももおまをいふといふ  
ゆき

らんといふおまをいふといふ

粟の句よ

お福も今まうりすとすのみを  
とつらみそれと酒の名は  
てらり又きんごとも日  
粟れりよ

濱松やらんごとくみされ  
とつらまうりごとく  
あり濱松といふ事  
なる

小方小こんかるとりつ  
小方にらんかるとりつ  
おのち小方に降三世明王南方  
小軍茶利夜又明王西方  
大威徳明王北方に合剛又

明王中央小大を不動明王とい  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
明王中央小大を不動明王とい

かつらんつとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて  
つとま履れ名みひけて

も纏々らりまへつとま履れ名みひけて



又春菫は小

鬼百八十九はさうのあゝさうらふ

とりのいあひさう

花よりしんあひさうのあゝさうらふ

春菫は小

花のよひさうのあゝさうらふ

とりのいあひさうのあゝさうらふ

他は

春菫はさうのあゝさうらふ

長石丸のけけさうらふ

とりのいあひさうのあゝさうらふ

長石丸は

春菫はさうのあゝさうらふ

とりのいあひさう

元々も春菫のあゝさうらふ

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

春留の神神素盞玉鳥斬

まもるた野の垣とてれみ  
とりの日こし

霧のちあきけきの程すまこ  
けりらつこまおまのちうとも  
まもるたあつこまおのゆき  
まもるたあつこまおのゆき  
まもるたあつこまおのゆき

永年白よ

こころこころこころこころ  
こころこころこころこころ  
こころこころこころこころ  
こころこころこころこころ  
こころこころこころこころ

女房花坊とてこころこころ

とりの長次丸とてこころこころ  
とりの長次丸とてこころこころ

とりの長次丸とてこころこころ  
とりの長次丸とてこころこころ

とりの長次丸とてこころこころ  
とりの長次丸とてこころこころ

とりの長次丸とてこころこころ  
とりの長次丸とてこころこころ

とりの長次丸とてこころこころ  
とりの長次丸とてこころこころ



らるる今もあしあつりつり  
てあつりつりあつりつり  
れりあつりつりあつりつり  
らるるあつりつりあつりつり  
らるるあつりつりあつりつり  
らるるあつりつりあつりつり

水衣のつりつりあつりつり  
毛吹着あつり

あつりつりあつりつり  
とつりつりあつり

あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり

とつりつりあつりつり  
あつり

あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり

あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり  
あつりつりあつりつり

事ふかろうつふたゆるりしこ  
進しこの故事よしてしゆる  
よや又麻の移ぶる家乃句毛  
明事ふかろの句毛  
あ鳥は麻板とたれ少なる  
とよもゆるれあつしつて  
丸山の書と白ん乃後外  
女子集徳之句毛

はまらわら書や白んれ鏡山  
とよもゆる物と

富士の餅書うつて移る  
長次丸以筆と富士れを連ふ  
と年書あしとつとま  
とよもゆるとよもゆる

壬代宗道万葉れを知らし  
和文不お傳ゆよ万葉集残  
あめす先達とあつとらあ  
まき後へ能よ万葉の奇  
を用ひて富士の書に新し  
と初書もみまなすの句毛  
富士れ移まうつむ書六月の  
星の足踏てもあつとらあ  
あよ今と家人の目お遠ま  
海も上代の書と用らうけ  
の書と後には移るはも軍  
れりういたくされも奇書に  
字あうのさ川あうにむと  
今の席あもゆるとや世書

事沙汰に批判よ三人古きを  
 批判よきし事お月まじし  
 連能小万葉に奇と不用の何  
 ありきや宗族宗長れ時かよ  
 軍士の多代難小き種とを  
 代赤介代甲子の浦れ奇と新古  
 今れ其の部よ入されん定家  
 家隆れ時万葉の奇と不ら  
 と推考して各母ありたあ  
 定とより先和奇撰にれお  
 と不知り凡去るむ何れと人  
 のとひ一付露とことて清ま  
 ずしものと業平れよありい伊  
 現物語よおにらや一口少ひ

てらうしと二条れ奇と苑人と  
 杉のひてよあか屋うにりき  
 下林結るれいとし新良今の  
 表傷れ部よ入るあけ集と  
 連奇の去境れ神とわさな  
 け奇も表傷の奇と恋の部  
 よ今れい恋れあふあしをとい  
 らんやれ種くのらしひ撰集  
 ありあらずと承りゆら新古  
 とれ部立と信して万葉れ  
 屋との日清てその秋あ家也と  
 ありしとよみらる奇と廣云  
 ますしと道理ありきとあえ  
 くと備借あり宗祇宗長の

み立と信じて清々と袖を  
 振りしきり富士は若くは  
 新すゝめくも又けわふ  
 明なる儀理ありきこころ  
 へ一愚業れとすか  
 くれととら

私に留まればそのまは  
 なるるより一建ちあまはら  
 その授よくえつめ人々業  
 よかられ日清しそわふ  
 ともあふ後成心奇す  
 六月れたるやふに  
 ねきこころきり  
 とよあり又明徳院

かきらあはらのみを  
 ともひむらの山乃下は  
 とあそこももゆるい  
 万葉の奇と不用とら  
 あらふ万葉に不尽と  
 けしつめの若くは  
 従宗祇宗長れけふ  
 ねるは難よとら  
 ぬ一宗祇の母

志くもふそめき山に  
 とらありいうら  
 新古と集名都よ  
 の陽れあといは  
 家隆万葉のあとい

むすしうふ事より一たりし  
れ書の名もいかなるか  
きく玉の弁れ海法よとよまん  
従ふ心おめくゆくは代く  
の勅撰れおの部ふ入るる方別  
花集各部 大に嘉言

ひとしに山法のみれふまわりの  
軍士れたる子の書にありける  
新古今集各部山を赤人  
田子れ浦より出せみれおの  
あーのたふれよ書りありつ  
續千載集各部相換

中ありたる軍士の書あり書い  
思ひのあみきしとらうとらう

凡雅集各部 四大臣

この根めくぬよりや移るん  
ゆの根のくくおの初を  
新千載集各部 中宮をまゝ宗女  
すぬうよたあしじきうのし  
しーのたふれ乃けこの志く書  
新後拾遺各部 勅書直  
さのちるあーの山風穴さして  
すもあうもみくを書りありつ  
右のあうもとこくくくうのん  
と志る人—又ぬ—れを時清  
さかして新とるす事—いそ  
いと通るもした似てははるる  
も孝にある物くきうとをなす

秋夜を小定してさうふ令  
いんえん軍士れきうりやを難し  
侍らんやれあきいりうら子細  
侍連してはこかあしり侍  
らとあきいれ軍士れきうあき  
山井者志いりりりり  
けり山井山集めいりりりり  
とも難解波よ一字もあき  
て二水よ入るう一句の能ふ小  
整気安伝とあり又一句の作  
ふ良座しりきういつきうあき  
えしりりりりりりりりりり  
年あきいりりりりりりりり  
あきあきいりりりりりりりり

禮もあきいりりりりりりりり  
を他雪のあきいりりりりりり  
いりりりりりりりりりりり

あきあきいりりりりりりりり  
雪女もあきいりりりりりりり  
け二句あきあきいりりりりりり  
なりと難しりりりりりりりり  
あきあきいりりりりりりりり  
をひりりりりりりりりりりり  
外回集りりりりりりりりりり  
あきあきいりりりりりりりりり  
長以丸信合人とあきあきいり  
りりりりりりりりりりりりり

目うゆいりりりりりりりりりり

菅女れくくくくくくくくくくく  
ちゆれ又菅女の目うらうら  
そゆくしうらやうあささうわ  
詩化うそくや東坡竹の葉  
毛の葉に

詩化うそくや東坡竹の葉  
とくく神気  
念をうすふまのされ木の葉  
けだすひよ

菅女れくくくくくくくくくくく  
とくくもゆくく又女子集よ  
ねまれおそろり陰の村附ぬ  
とくくもゆり  
ゆくくもゆくくくくくくくく  
おねとくくくくくくくくくく

おねとくくくくくくくくくくく  
あうやうたいひゆくく女子行  
よも女子行と云うゆけること  
ごゆ梅とくくくくくくくくくく  
本とくくくくくくくくくくく  
いあやうらあうくくくくく  
句よあまうくくくくくくくく  
わうくくくくくくくくくく  
とくくくくくくくくくく  
さねとくくくくくくくくくく  
あま集とみゆれくくくく  
まよゆ五月あひのまに  
あまゆくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくく

と侍りまねにけりてと志心  
 ともらしてせしむらるる  
 少室寺に作らば其集を  
 志す神ぬゆに難くはれ  
 みまらむれは男たても  
 奇の侍らやうんとおわつ  
 る

秘ふとひまらるる人君女  
 けりおねのひ君女の侍り  
 とひれ又君女とてふも  
 心ひれ是より十八日よ君女  
 此部立とまらけりも  
 君女の侍り入らる侍  
 なるえひ

ゆりいふ事といふも  
 心もやまゆいふこと  
 志ぬらる事  
 心くくはれ或人けり  
 心くくはれ  
 心くくはれ

夜への森やあり神の君女  
 さふく神のゆき女といひ  
 つひめきやうよらるは  
 侍りし

心くくはれ  
 君女といふ事  
 君女



とて子侍り他は等流の  
くも事もあり今をれと天女  
れ句てつるれい一句のれを  
とも

ゆいあいの書女もやきろくろり  
け句氷室守よ書女乃句の  
手本ろあへーとくろり一句れ  
心流物事感教信教の成り  
よやさのこも本よたあへんこ  
他ともおあられを

女三ろくろり書や拍本おあひの  
一句の拍本よ書れおろくろり  
ろをとりろくろり書女のんを  
よろくろり部立よ入侍ら

侍行のあておむや書佛  
佛よほくろりろくろり侍行  
とありーとくろりや

お地蔵ろくろり白妙れ書佛  
文の白き仏地蔵にろくろりを  
書佛形もゆき書<sup>サ</sup>書  
宅<sup>サ</sup>書<sup>サ</sup>の書佛とたのまひ  
れーとくろりあへー

書心の書まもやまたぬさ仏  
書心の書ま子の書ろくろり難  
りどつとろくろり成佛を続  
しーとくろり書あしーと  
こ

他は神とあみろくろり書や書仏

宗尊一巻の御東大寺を  
りして大佛のいとまろく  
書たうらせなすくとま  
他は神と是も海この書佛  
とらうも作り別を取れよ  
みらるる

あつちの海も遠くつゆらわさの花  
来者道首他く一句の心こよ  
いさうくあつちの心よまこと  
しうれはと云又まかるとい  
時あつちの心のまことま  
いとこかんとつゆら

はむと書假名々々みとたむ  
うらにつむと書してせいの  
うらとまのうらとつゆら  
あつちの心よまことま  
のまらひとまよまこと  
つゆら

あつちの心よまことま  
うらとまのうらとつゆら  
あつち

あつちの心よまことま  
うらとまのうらとつゆら  
あつちの心よまことま  
うらとまのうらとつゆら  
あつち

あつちの心よまことま  
うらとまのうらとつゆら  
あつちの心よまことま  
うらとまのうらとつゆら  
あつち

少くもして我の天よみつや  
とていつとていつとれいかうこ  
るも入らうとてや

朝のよみ去年と云物ておの  
一句のふと年の古れ花の去年  
のおおとく入〜とていつとてや作  
志は戸林森とあり又霜を  
白みけ白一字のさあうす作  
志は戸林森とゆらうのく成  
くおのり〜ゆとていつとて  
と入て〜ゆらうのぬ〜ゆ  
餅書とていつとていつとて  
は茶書ゆのゆ

とていつとていつとていつとて  
れとのゆ〜ゆらう一集  
るゆのゆとていつとて  
そのゆ〜ゆらう〜ゆ  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう

ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう  
ゆ〜ゆらうゆのゆ〜ゆらう



又

眞正の竹の歌ありてははるかに  
とらふも侍り他志の句の細と  
りひげたれい等れとの友  
くや

お松の竹の歌ありてははるかに  
日集の竹の句の句

竹の子たるをせよすふ教は  
音執はよ

吾彩の竹の腰はせ教は  
又先年経良と云人の句

若竹の思ふはるは教は  
とらふも侍り教は

す

お松お竹の歌ありてははるかに  
女子集よ

お娘の歌ありてははるかに  
ともいふた丸の歌ありては

お寺の歌ありてははるかに  
お松の歌ありてははるかに

お松の歌ありてははるかに  
お松の歌ありてははるかに

お松の歌ありてははるかに  
お松の歌ありてははるかに

お松の歌ありてははるかに  
お松の歌ありてははるかに

お松の歌ありてははるかに  
お松の歌ありてははるかに

とらふかゝるものなり

かゝるものや蛇々も桐花たり

有る統はよ

かゝるものやあつらひきうーは

とらふものゆり又曰集よ

美盛うかゝるふあつらひきうー

右に三句の集はれりてこの集

尸あやゆーん

数あよあつらひきうー

け前母

あつらひきうーあつらひきうーあつらひ

あつらひきうーあつらひきうーあつらひ

又女子集よ

あつらひきうーあつらひきうーあつらひ

二七

一句ははききき雄山とけい出

せうあつらひきうーあつらひきうー

句も季とあつらひきうーあつらひ

雄山はきききききききききき

歟

鬼はあつらひきうーあつらひきうー

人のせうあつらひきうーあつらひ

あ

篇分れあつらひきうーあつらひ

まうき銀座よとあつらひきうー

年季自身と云人のあつらひきうー

名はあつらひ

まあ板や銀所乃玉あつらひ

とらふものやあつらひきうーあつらひ

二七

二七

世に母かくしるまに白菊を衣  
丸も恋まうしつとまれも  
あまうらや

たにやえ狸移りて胎つこ  
けりいせん年 夢執は母紀  
明と去人

あつて移て腹鼓らたん  
とらり狸移りつとある  
（母等すれのうあゝ元別二方ふ  
く）同集よるし入るら  
山置おれはひさ留れ  
けり詭言あつらま 古あふ  
ましらと増母ひひけら  
あり

よき氣もみ子餅つと志す  
と戸の餅とくらぬときり  
大食よ言れ餅くらわら  
あつら 又月のあふ

よき氣みてもああやのら月  
といつとも入けり

志すす書や借法れ測おひの波  
あふ人 浪屋和尚よりけ物と  
けり 師老よえおやう  
けりおらるきたらけり  
とあそとされ 又古あふ  
よららるるまやせんれ  
あうえり人のこひ  
とよあつらけり

養應二年孫生上院日

明曆二年丙申初春吉辰

寺町通圓福寺町

秋田屋平左衛門板井

崑山集廻文部之目

凡廻文之和奇これ一神として

右来ある事其の例れとかく

廻文神れ教立と一ふとあり

むらうの代くれ勅撰集あり

り一先達れ家集あり

あつあつと廻文のもをえん

むらうの代くれ勅撰集あり

たえも花のさくらん

あめもつらつとわさ

くももはらうとあ

とりつとるく一るあも廻文

錦字れ詩とりつとるあも

法師あり



かの國は母もいとわづらひ  
 みえあはれにすまはる月氣  
 とよあつともまはるそのん  
 こころと又基後に悦目抄と  
 ぬ物は廻文れ屋をとりは  
 とは釣々ふもむす半にあ  
 とと割かとる建ありいられ  
 けは能階陣のるひも地能  
 階さるもとく一もやうやく  
 折角は廻文とと氣根とけや  
 一上根一存人よ卒約百約ふ  
 ととら半さうといあ  
 光陰母いあすやそれをも  
 よくあはれはらうあ理

夢えぬもとと下へかして  
 あらうあうとあうゆま  
 き成りあり何とえと  
 して愛とえしこしてと  
 當に別あの方とをひ  
 廻文するそのまはらうめ  
 う半のつは修もた方れをよ  
 くれ不拾よりうきい文を句を  
 作りて後別ればもよ  
 きらちうと一は集の廻文  
 とも一く母羅さんとも  
 といふはらうととと  
 けしと

いかんははるあふみはらうあ

まうのきき子れつるあうま  
を成とわうは白の苗水は白  
と云人の白うらと長政丸方  
つらせらよめくめすもせい  
神一とらや富山集板りの  
後作ふは白とこそ長政  
りとける先代れ先作ら  
長島せんひきまー青いぬえ  
まし入るあうらひやうま  
まて長政丸せうに丸後方  
らりの後白と記とすれは  
ゆい白とよくふあうら白  
よ長島とひけいさう後白  
長政丸はうらをてつる

らーとらあれ人の名をて  
つらとて書してくーゆら  
さうとていふくーひひま  
白とよきれい先代とら  
よ長島とひけい長政丸よ  
きて何の終りに終らぬありき  
られゆられとて後うらあ  
ひんさくのちあひりうと  
りふへれと毎上れ風神の  
長政丸はうらりの島丸よ  
まきく先代とらゆを  
よまひ先代ありうらうら  
りきとあひに後物あり  
ひいむらこの音よ先代とら



